

# 沿岸性重要貝類の資源造成技術開発（バイ）

（増養殖試験研究事業）

道根 淳

## 1. 研究目的

かつて県内でまとまって漁獲されていたバイは、漁網防汚剤や船底塗料の主成分である有機スズの影響により雌個体に雄化現象が見られ、正常な生殖行動が行われず、これが一因となり資源が壊滅状態となった。その後、有機スズの使用が禁止され、近年、沿岸域の環境が改善し、資源回復の条件が整ったと判断されたので、親貝を移植することによる資源の早期回復の可能性を検討する。

## 2. 研究方法

追跡調査：平成17、18年度にJFしまね益田支所（旧益田市漁協）から購入し、計11.4千個放流した親貝の生残、分布状況ならびに新規加入群の発生状況の把握を行うためかご調査を実施した。かご調査は、平成19年5月21～23日、直径50cm、高さ15cmの三度笠タイプ（目合25mm）のかごと60×45×20cm折りたたみ式雑かご（角目6mmのカバーネット取付け）を延縄状に連ね、1連50籠とした。籠の中に入れる餌は冷凍アジを用いた。籠の浸漬時間は21時間～24時間30分であった。

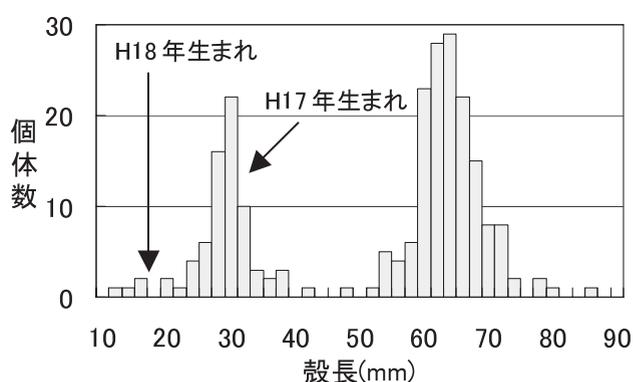
桁曳き調査：本種孵化幼生の浮遊期間は数日であり、放流区域以外の区域に着底している可能性があるため、平成19年10月1～4日にかけて、多伎地先のほか、漁業者への聞き取り調査によりかつて漁場であった湖陵、大社各地先の水深5.2～15.1mの区域で1ライン当たり10～15分の曳網による桁曳き調査（水中ポンプによる噴霧式貝桁）を実施した。

## 3. 研究結果

### (1) 移植放流後の追跡調査

追跡調査の結果、水深5mラインで49個、10mラインで154個、15mラインで20個、20mライ

ンで8個のバイが採集され、そのうち天然貝と思われるものが5mで14個、10mで43個、15mで17個、20mで7個の計81個体が採集された。今回の調査では水深10mラインでの再捕割合が高くなっていた。天然貝と思われる81個体のうち、平成18年生まれと思われるものが7個体、平成17年生まれと思われるものが66個体であった。殻長50mm以下の小型個体の採集は前年より増えており、親貝の移植放流が当海域での再生産に寄与していることが窺えた。



### (2) 桁曳き調査

多伎地先から大社地先にかけて、計13回の調査をおこなったが、多伎地先の水深7.5mラインで殻長21.4mmのバイが1個体のみ採集された。このほか各回次とも1～2個のテングニシが採集され、どの海域においてもヒラタブンプクの入網が多かった。